



この一冊

Vol. 99



会員 奥野 滋 (37期) ●Shigeru Okuno

某月某日、『この一冊』を探すために、銀座の行きつけの居酒屋『あっとほーむ』に出かける私であった（この段階で既に執筆の趣旨を間違っていたようだが…）。

ご存じ八百新酒造の「雁木」を2杯飲んだところで、左後ろにいた若い男性2人の会話が弁護士風だったので、「雁木」1杯をごちそうして、君らを選ぶこの一冊は何かないと聞いてみた（因みにやっぱり弁護士であった）。

1人が直ちに曰く、「吉村昭の『ポーツマスの旗』です」。この答えを聞いて、我が意を得たり！という思いであった。

奥さんの津島節子さんが芥川賞作家であるのに対し、吉村さんは数々の賞を取ったものの芥川賞を受賞できないまま世を去ったのであるが、客観的描写を重視する作家であって、客観性に乏しい私にとっては、好感を持てる作家であった。

『ポーツマスの旗』は、日露講和を実現した小村寿太郎の苦悩を描いた秀逸な作品であり、この一冊にするか、と一瞬思ったが、それでは芸がないので、吉村さんのほかの作品について、彼と意見交換を行っているうちに、やはりこれだなと思いついた一作があった。

明治の初期、行くところが

『ローマ人の物語 1 —ローマは一日にして 成らず [上]—』



塩野七生 著
新潮文庫
464円(税込)

なくなってしまった紀州徳川家（正しくは尾張徳川家である）が、北海道南部の八雲という場所に移住を決意し、先遣隊を送り込んだところ、気候が不順であるだけならまだしも、移住した人がヒグマに次々と襲われるという、踏んだり蹴ったりの物語であるが、ヒグマの生態を詳細に描いており、これまた秀逸な作品であった。

これは勿論『羆嵐』という一作であるはずで、そう決め込んで本屋に行ったところ、ヒグマに襲われるところまでは一緒だが、『羆嵐』は北海道北部の手塩という場所を舞台にした小説であり、時期も大正と私の記憶と全く違うではないか。それでは、何とい

う題名だったか、その後いろいろ調べたが、結局よく分からず、そもそも吉村さんが書いたものではないかもしれないということにすらなってしまう。誰か教えて！！

そのために、吉村さんは『この一冊』から脱落し（ごめんなさい!）、結論として『この四十三冊』を出さざるを得なくなった。一冊でないため躊躇していたが、ご存じ塩野七生さんの筆による『ローマ人の物語』の文庫版である。現在5回目の読破に挑戦しているが、読破する価値は十分にある。他民族や他人種を排斥するのではなく、敗者をも同化する政策、数多くのローマ街道という基幹道路を整備し、敵に利する危険より、他国との交易を図るといった政策などによりローマ帝国が成長したという論調、他方、多神教国家であり、ほかの民族の宗教にも寛容であったが故に発展したローマ帝国が、キリスト教という一神教を国教にしたことで滅亡に向かったという論調は独断的だが説得力がある。塩野さんがカエサルのファンであるが故にこんな大作を執筆したのではないかと窺わせるところもあって、大変興味深いのであるが、肝心なことを書く前に字数が尽きてしまった。残念！！